

発災とともに駆けつけ、
協働で支援し、
被災者に寄り添う
～災害ボランティア・NPOの先達紹介～

各地で災害が発災した際、いち早く被災地に駆けつけ、災害ボランティアセンターや社協と連携・協働を進め、被災者への支援を行うボランティア・NPOの活動を紹介します。

第8回

一般社団法人 ピースポート災害支援センター (PBV)

ホームページ : <https://pbv.or.jp> Facebook : <https://www.facebook.com/PBVsaigai>

こばやし しんご
小林 深吾 理事/プログラムオフィサー

臨床心理士/公認心理師。2003年より国際NGOピースポートの船内運営・企画に携わる。2011年、東日本大震災では、発災直後から先遣隊の一人として宮城県石巻市に入り、主に行政や自衛隊、社会福祉協議会、各NPO・NGO団体との渉外業務を担う。その後も現地責任者として長期的な復興支援活動を実施



いつ、どこで、どんな災害にあったとしても いち早く駆けつけ、必要な支援を届ける

地球一周クルーズ旅行で知られる「国際NGOピースポート」は、1995年の阪神・淡路大震災の災害支援活動に始まり、世界中のネットワークを活かして世界各国の災害支援にも携わってきました。しかし、2011年に起きた東日本大震災で先遣チームを派遣した際には、大規模な被害を目の当たりにし、被災地のニーズに対応しながら継続的な支援の必要性を痛感しました。緊急期から復興期まで災害派遣に対応できる体制づくりを行ったことをきっかけに、「ピースポート災害支援センター」(以下、PBV) が設立されました。

設立後も、日本各地で起きた地震や水害、土砂崩れ、豪雪などの被災地の支援活動を続けてきました。災害の規模や種類により活動内容は異なりますが、まずは被災地へ先遣スタッフを派遣し、現地ニーズ・状況・条件などを調査したうえで、必要な支援のかたち(人材・物資・資金・ノウハウなど)を検討し、被災地に合った支援を届けています。職員やボランティアを送り出すなかで気をつけているのは、被災地に負担をかけないことです。平時から「災害ボランティア・トレーニング」(専門的スキルを学ぶのではなく、一般の方ができることを学びます)で、現地での支援のイメージ、

被災地での心構えや注意点を学ぶことでボランティアの力を引き出します。

令和4年(3月)福島県沖地震では、宮城県山元町社協から支援要請を受け、地元の支援団体「一般社団法人OPEN JAPAN」(本誌2022年4月号で紹介)等の団体と連携し、屋根補修の支援を行いました。被災地の社協・行政・NPO等と情報共有を図り、被災者が取り残されないよう支援活動に取り組みました。

また、令和4年(9月)台風15号では、静岡県内にPBVスタッフを5名先遣派遣し、地元の災害VC等の関係機関や各支援団体と連携し、静岡県葵区・清水区にて住民の方より被災状況とニーズをうかがい、物資支援、炊き出し支援、被災家屋の清掃・応急対応、地域での支援拠点設置にあたっています。

被災地の社協や行政との 連携・協働で大切にしていること

大規模な災害になるとさまざまな外部支援者が活動します。その時、多くの団体が一齐に被災地の災害VCに行っても、地元社協が調整する負担が大きくなってしまいます。そうした災害VCに寄り添いながら、それぞれの外部支援団体の動きの共有や地元社協との連携をスムーズに図れるよう連絡・調整の部分に協力をしています。

また、被災地の地元団体ともしっかりと連携を図りながら、地元団体に災害やその後の復興に向き合ってもらえるネットワークをつくるのが大切だと考えています。地元団体の主体性を大切にしながら、人の派遣やノウハウを伝えたり、協力者の紹介などを行ったりしています。



令和4年8月3日からの大雨での新潟県村上市・関川村災害VCの運営支援



令和4年台風15号で床下に潜り消毒を行う



地域支援拠点「にこにこカフェ」で被災した方々と交流をし、被災者のよき相談役になったり、支援物資を届けています(令和4年台風15号)



最近の主な 災害対応

令和4年台風15号(2022年)、令和4年8月3日からの大雨(2022年)、令和4年ウクライナ支援活動(2022年)、令和4年福島県沖地震(2022年)、令和3年8月豪雨(2021年)、令和2年福祉県沖地震(2021年)、ベトナム中部洪水被害(2020年)、モーリシャス重油流出事件(2020年)、台風19号(2019年)、モザンビーク サイクロン・イダイ(2019年)、北海道胆振東部地震(2018年)、西日本豪雨(2018年)、グアテマラ フェゴ火山噴火(2018年) ほか